

越境するアイデンティティ ―われわれ／かれら意識の壁を乗り越える

スティーブン・マーフィー重松

自分がまだ若くて人生の意味について悩んでいたとき、もし自分の存在目的があるとしたら、それはたぶん日本人の母とアメリカ人の父との間に、悲劇的な戦争のあと自分が生まれたことにあると思った。両親は、世界を自国と他国に分け、お互いに殺戮し合った国の出身である。

自分が成長するにつれ、世界は国と人種と宗教で分けられていることに気がついた。そして大人はいつも世界を黒か白か、東洋か西洋か、日本人かアメリカ人かに分けようとしていた。日本人は私のことをアメリカ人だと見たし、アメリカ人は私のことを日本人だと見た。でも、自分にとっては自分は自分でしかなかった。

もし私が日本人を嫌ったとしたら、自分の母親を嫌うことになるし、自分をも嫌うことになる。そして、アメリカ人を嫌ったとしたら、父親を嫌い、自分をも嫌うことになるわけだ。それはおかしい。世界を単純にふたつに分けたとすると、私はどちらにも入らない「他者」になる。どこにも当てはまらない場所。それが自分自身の居場所だ。

国と人種の境界線のないボーダーランドに住むこと——このことが自分の生きる意味と運命だと考えるようになった。自分のアイデンティティは国境を越えたところにあった。イデオロギーや文化やシステムや国への忠誠と従属から自分を解き放つ。一定のどこかに所属するのはいやだったが、どこにでも適応できると思っていた。自分をはじき出そうとするすべてのものと戦い、すべての人がメンバーになれるグループにだけ所属しよう。これが私の理想だった。

今、私はもう若くはない。若いときのように自分のアイデンティティのことで頭がいっぱいなわけでもない。でも、いまだに国境のないボーダーランドに住む意味を探求している。私はマージナル、ハイブリッド、世界の狭間に生きる。アメリカは自分の国だし、日本も自分の国だ。でも、どちらも故郷ではない感じ。悪い意味ではなく、むしろこの孤独と自由を享受している。

私は日本人で、アメリカ人だ。でも、ほとんどの日本人は私を本当の日本人だと思わないし、アメリカ人も、私を本当のアメリカ人だと思わない。両方の国で多数派の人たちは、自分たちが本当の日本人でありアメリカ人であるといい、マイノリティを差別して迫害する。そして、マイノリティにマジョリティと同じになるよう要求する。でも、抑圧されることで私は逆に自尊心が増し、自分のアイデンティティをはっきりと自覚することができるようになった。自分の権利を要求し、国民としての責任は果たす。

人は自国と他国を線引きするように、国家、人種、性、宗教間に線引きすることで、バリアーを築き、正当化するために争い、殺し合う。私はこのバリアーをもっと柔軟で浸透性のあるものにしたい。

私は日本人だがアメリカ人でもある。私は西洋人であり、同時に東洋人でもある。私はカトリックだが仏教徒でもある。私は男だけど主夫でもある。私はいろいろなグループに属しながら、どのグループにも拘束されない。

私はこのような矛盾する緊張感の中で生きている。そしてこれらのすべてのアイデンティティを主張し、だが、いかなるものによっても制限されることを拒否する。人との多種多様な違いを認めると同時に、共感、思いやり、トランスフォーメーションの共通性が大事だと感じている。実存的な孤立感を乗り越えた喜びの体験こそが、他人との一体感を感じる時である。

他の人より自分は人間らしいと信じる人たちとは、同じ思考を持ちたくない。そうならないために僕は毎日苦闘している。かれらは世界を自分たち人間と非人間とのふたつに分離し、非人間とみなしたほかのグループの生存を脅かしたり、殺人さえも可能であるような錯覚に陥っている。多文化社会で現代の複雑な時代に生きるということは、私たち一人ひとりにすべてが相互に連結した展望、意識、世界観、グローバル・アイデンティティの認識と形成を求められているということなのである。